

## 論文の内容の要旨

論文題目 渾沌の死と生—中国農村基層ガバナンスの苦境とその対応（1980-2015）—

氏名 馮川

近代国家の基準または国家政権近代化の基準から判断すれば、人民共和国の人民政権の確立はすでに近代国家または国家政権近代化の達成を意味している。ところが、改革開放以降の80年代、中国共産党と中央政府は人民公社化運動や文化大革命運動など人民共和国の前半の三十年の歴史的経験に対する再検討と反省に基づき、国家のガバナンスシステムとガバナンス能力の近代化がまだ達成していないという判断を下した。「国家能力の近代化」が強調するのは国家の社会に対する統制という側面であるとするならば、「国家のガバナンスシステムとガバナンス能力の近代化」は国家のガバナンス方式を基とする近代化であり、ここで強調されるのは、国家が国内のガバナンス方式をコントロール出来ているという点である。「国家のガバナンスシステムとガバナンス方式の近代化」の基準は、「規範化」という概念に集約することができる。「規範化」のキーポイントは、明確な分業・限定された機能・単一的・法定的・マニュアル化、という要素である。「近代化」の価値観を信じ込む人々の予想によれば、「国家のガバナンスシステムとガバナンス方式の近代化」の達成は、社会の安定と発展を保障し、基層政権の合法性を獲得する、という目標の達成に役立つはずなのであるが、「規範化・制度化」を狙って策定した改革案は、基層政権の合法性獲得に役立つどころか、基層政権の合法性が削がれる、という結果を引き起こした。国家の財政移転に頼って大量の資源が基層社会へ投入されていたものの、農業税徴収の行政コストの増加、土地紛争の頻発、農家の利益追求型の陳情の激増、説得に応じない頑固な世帯の続出、公共インフラ・公共サービス提供の停滞などの状況が発生していて、社会が不安定となり、人々の不満がつのっている。

以上のパラドックスが発生する論理は、社会目標と国家目標の統合、国家目標の達成に役割を果たす「在来的社会規則」が「国家規則」に規範化され、社会目標と国家目標との統合を阻害したわけである。また、こうしたパラドックスの存在に加えて、国家の社会目標と国家目標との合致を維持するコントロールメカニズムはやはり存続しているため、中国農村基層ガバナンスの苦境が生じる。

中国農村基層ガバナンスの苦境の発生を分析するうえで、そもそも「在来的社会規則」と「規範化した国家規則」の根本的性格は何か、「規範化した国家規則」が「在来的社会規則」に介入し衝撃を与える過程に内在しているメカニズムは何か、という問題を解明するのは必要ではないかと考えられる。

そこで、「渾沌」という本研究の最も中心的な概念が導入された。本研究の「渾沌」という概念の意味付けは『莊子』「応帝王篇」の寓話に由来する。「渾沌」を「在来的社会規則」の隠喩として捉えたいため、「在来的社会規則」の特徴は「全体的、連続的、流動的、統合的」という渾沌の性格に当てはまると考えられる。言い換えると、「在来的社会規則」は線引きを排除する傾向がある。これに対して、「区切り」ということは、寓話の中での「穴を開ける」という記述に当たる。「穴を開ける」という作業によって、渾沌の機能と構造が分断されて、渾沌が解体されるようになった。「穴を開ける」という作業自体の性質は、「規範化した国家規則」の性格に当たる。儻と忽の本意は、渾沌を窮地に追い込むのではなく、渾沌の生きる状態を改善する、ということである。と同様に、国家ガバナンス方式の近代化追求の本意は、農村基層ガバナンスを窮地に追い込むのではなく、政権の合法性を獲得する、ということである。寓話の中の「渾沌の死」という悲劇的な結果は、「規範化」によって引き起こされた社会の不安定、社会不満、国家目標との緊張関係などを隠喩する。

在来的社会規則としての渾沌の様態をそれぞれ借用するならば、国家目標の達成は無難になる。農村における生産・生活を取り囲む渾沌の外部環境とガバナンス方式の渾沌とは互いに順応し合うことができるため、行政体系と社会の関係における大規模で深刻な官民対立、または地方社会における行政能力空洞化から生じがちな「自己統制的ガバナンス」と「無政府的ガバナンス」（伝統的宗族社会に近い状態）という局面がほとんど形成されないのである。

80年代から推し進められた基層ガバナンス方式に対する規範の整備は基層ガバナンスを単に個々の村民との妥協へ向かわせ、可視化された数値に照らして財政資源の分配を実施させた。つまり、事件自体のみに依拠して行政事務と民間紛争を扱うことに向かわせた一方、ガバナンスの主体の単純化とガバナンス手段の専門化を図った。

規範化される基層ガバナンスは、すなわち機能と役割が線引きされる基層ガバナンスともいえよう。渾沌は規範によって線引きされた結果、死亡に向かった。その結果、制度や技術の選択肢が狭められ、多様な価値や方法を前提とする違ったあり方への想像力が遮断された。渾沌の内部において発生した区切りとそこから引き起こされた渾沌の死によって、中国農村の基層ガバナンスの面では、農業税徴収が「天下第一の難事」となることに加え、土地紛争の多発、経済格差の拡大、民事紛争の急増、農田水利の麻痺状態、最低生活保障資源分配の難航、というさまざまな難局が続出してきた。そのようなガバナンスの状況は、経済建設、社会安定、食糧安定多収穫、経済格差の解消などの国家目標と明らかに相反している。言い換えれば、ガバナンス方式の規範化が、基層行政組織の社会目標を国家目標の一致を阻み、社会目標がコントロールできなくなる結果をもたらした。

しかし、①国家目標任務の細分化・指標化、②上級機関に責任を負う目標責任管理、③目標達成をめぐる競争激励システムから構成される国家の目標制御システムは、少しも緩んでいない。国家目標は、地方行政に強大なコントロール力を示しうるため、税費徴収・不法建造物の対処・民事紛争の調停・水利体系の整備・資源分配など農村基層ガバナンスにおいては、地方行政主体は「規範化」が「渾沌」の内面に境界線を引いてから生じる農村事務の難題に直面する一方、さまざまな方策を講じて国家目標を達成する必要もある。

要するに、①国家のガバナンス手段について唱えられた規範の整備と、②経済建設の同時進行のため、地方行政主体はガバナンスの苦境に陥った。

①ガバナンス手段に対する規範の整備は、基層行政主体の財政権と行政権が上級行政機関に収められ、村人が持っている各権力の内容と限界を明確化させ定着させることを意味している。それに対して、②経済建設の推進は、行政事務が下位行政機関にレベルに応じて割り当てられると意味している。前者は基層ガバナンスの各側面における区切りとみなしても構わないが、一方後者は区切りとは相容れない渾沌を育てる環境を作り出す。したがって、政権合法性の獲得を目指す規範の整備と社会不満・不安定との共生状態は、区切りと渾沌の対立に収斂してとらえることができる。

顔馴染み社会は存続しており、所有物の概念は国家の政治的イデオロギーである「公有制」と合致している、という環境の下で、「規範化」の境界設定を戦略的に忌避し、「渾沌」を復活させることを通してのみ、地方行政主体は地方社会のガバナンス状態を国家目標との合致状態に誘導し、窮境にあるガバナンスを苦境から脱出させるのである。線引きのない「渾沌」の存在は、まさに中国農村基層ガバナンスが全体的に安定できる環境の下に持続させる要因であると認められる。

裏返してみれば、もともと渾沌を育てる政治的、社会的、経済的環境が根本的に変わっていない場合に、区切りをもたらす規範はしばらく渾沌を殺したとしても、渾沌は規範を忌避するもっと強い免疫力を持っている形で復活することができるのである。渾沌の復活は一見、まさしく規範化を指針とするガバナンス方式の近代化に逆行することにみえるが、苦境に陥った農村基層ガバナンスを救い出す良薬である。ガバナンス方式の規範化という中央政府の政治的追求の下に、その良薬は多少なりともある程度の政治的責任の上でのリスクがある。にもかかわらず、農村基層ガバナンスの外部環境、つまり国家目標と行政体制などの要素は渾沌を取り戻す必要性を生産している限り、基層ガバナンスに関与している各主体にとって、郷村ガバナンスがスムーズな展開されるために、渾沌がもたらした好ましい機能を活用するのが得策と政府によって判断されていることである。

都市開発が終わり、顔馴染み社会がほとんど解体し、公有制が形骸化された段階に至った後に、中国のガバナンス方式が初めて渾沌から次第に脱出し、社会不満と不安定のおそれのないままに、近代化を達成する可能性を見込むことができるのではないかと考えられる。けれども人間関係の結合原理が日本社会と異なるため、顔馴染み社会がない中国社会は夢物語のようで現実味がない。なので、中国の顔馴染み社会の変遷と地域差をさらに観察する必要がある。いずれにせよ、如何に追求しようとしても、渾沌脱出とガバナンス方式の近代化は、ガバナンスのアクターとしての社会が熟成してから生じる結果であり、各種の行政手段によって人為的に造成する目的であるはずではない。